

## 相互理解につながるコースとは？ —成人向け会話入門コースの試み—

How to Enhance Mutual Understanding through a Conversational Japanese Course

丸谷しのぶ (MARUTANI Shinobu)・藤長かおる (FUJINAGA Kaoru)

国際交流基金クアラルンプール日本文化センター(The Japan Foundation, Kuala Lumpur)

国際交流基金クアラルンプール日本文化センターでは、2011年10月からJF日本語教育スタンダードに基づいて開発された『まるとと 日本のことばと文化』を試用した成人向け会話コース(入門、初級1)を開講している。1レベル40時間(2時間×20回)のこのコースでは、「課題遂行能力」と「自律的学習能力」を養成しながら、学習者に異文化理解・相互理解の機会を提供することを目指している。本報告では、本コースの実践が異文化理解・相互理解につながる可能性を考察する。

本コースの授業設計は、「なにができるか」(Can-do)を到達目標とするバックワード・デザイン(backward design)による。授業ではまず、文脈付きのインプット理解活動を行った後、アウトプット活動へと進み、小グループで到達目標を実現するコミュニケーション活動に取り組む。その中で、学習者それぞれのニーズに応じた言語知識の獲得を目指し、「課題遂行能力」(学習者自身が必要とする状況で課題が遂行できる能力)の養成を図る。

毎回の授業では、「Can-do チェックシート」を用いて到達目標の確認と自己評価を行い、自律的学習に必要なモニター力を養成する。また、興味を持った日本語・日本文化について主体的に体験・調査する「ミニ・プロジェクト」を学習者に奨励する。教室内外での学習経験、文化体験は成果物と共にポートフォリオに保管し、学習者が管理する。このようにして、自律的学習能力の養成を図る。

ポートフォリオは学習者自身が学習を振り返り評価するためのツールとして、コース中に2回行う振り返りセッションでも活用する。そのセッションでは、学習者同士がポートフォリオを見せ合いながら学習経験や文化体験を共有する。そして、自分の経験や体験では得られなかった、自分とは違う視点に対する気づきが生まれることを期待している。

本コースの成果として、学習者が①目的を持って主体的に学習に参加していること、②いろいろな学びを体験し、さまざまな可能性に気づくようになったこと、③話し合いを通してお互いの体験や学習に興味を持ち、それを自分と関係づけて考えられるようになったこと、④自分の学習プロセスに責任をもち、少しずつ計画が立てられるようになっていくこと、などが挙げられる。そして、仲間と共に学ぶ楽しさと意義を学習者自身が感じることが、お互いの考え方や文化を尊重する態度を育て、異文化理解・相互理解へとつながっていくのではないかと考える。